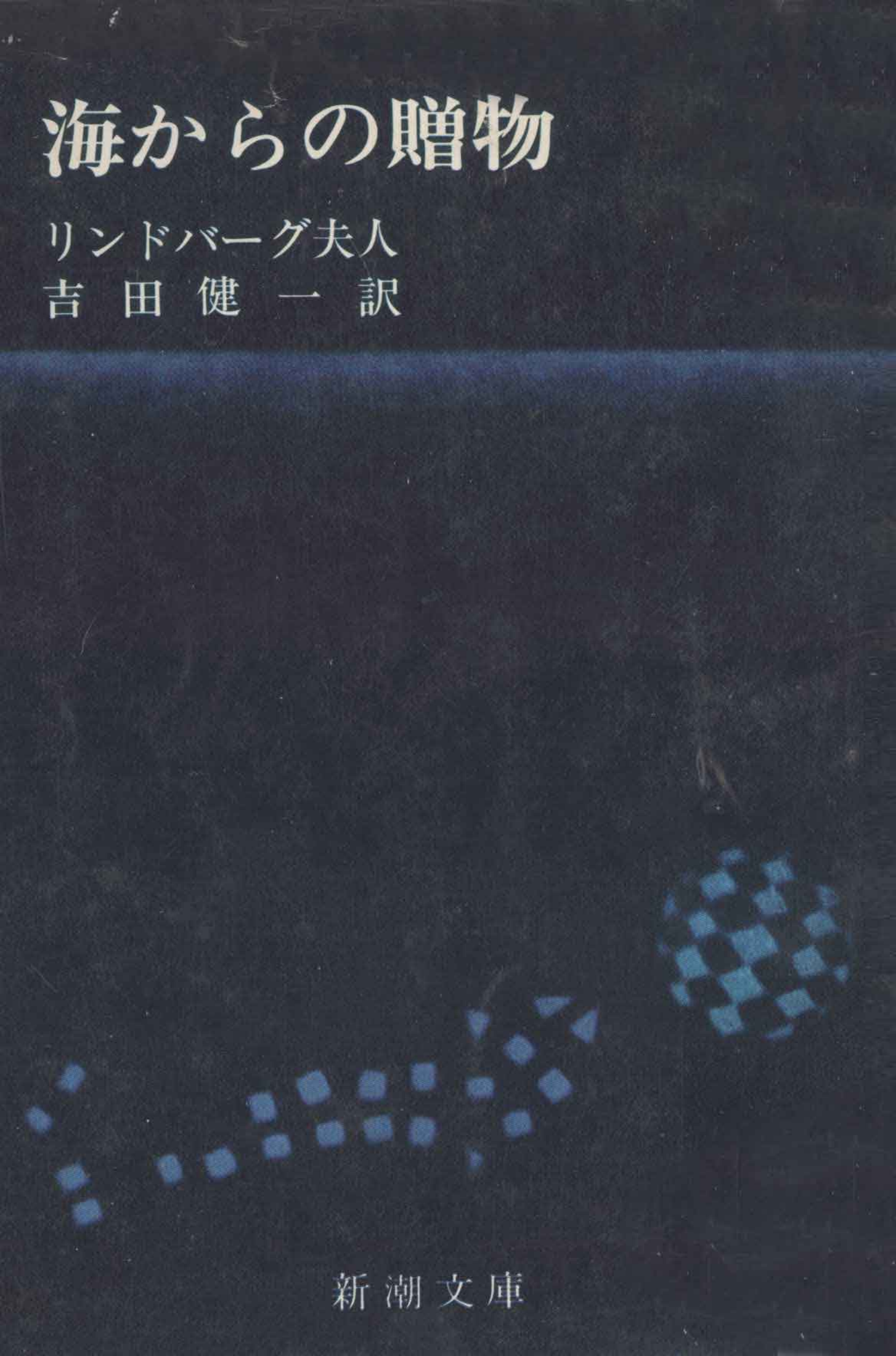
海からの贈物

リンドバーグ夫人
吉田健一 訳



新潮文庫

Title : GIFT FROM THE SEA
Author : Anne Morrow Lindbergh
Originally copyrighted by Pantheon Books Inc.
Copyrighted in Japan by Shinchosha through the arrangement with Anne Morrow Lindbergh

海からの贈物

定価は帯またはカバーに表示してあります。

新潮文庫 黄10

昭和四十二年七月二十日 発行
昭和四十七年二月二十日 七刷

訳者 吉田健一
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替 東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊟ 印刷・塚田印刷株式会社 製本・憲専堂製本所
© Ken'ichi Yoshida 1967 Printed in Japan

新潮文庫

海からの贈物

リンドバーグ夫人
吉田健一訳

新潮社版

1746

目次

序……七
浜辺……一一
ほら貝……一七
つめた貝……三五
日の出貝……五七
牡蠣……七三
たこぶね……八五
幾つかの貝……一〇五
浜辺を振返って……一一五
あとがき……一二三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

海からの贈物

序

ここに書いたのは、私自身の生活のあり方、またその私自身の生活や、仕事や、付き合いの釣り合いの取り方に就いて考えてみるために始めたものである。そして私はものを考える時は鉛筆を手に持っていたほうがいいので、いつの間にか書き出した。そんなふうにして、私の考えが紙の上で形を取始めたのであるが、初めのうちは、私は自分が経験したことが他の人のとは違っているという気がしていた（私たちは皆そういう感じを持っているのだろうか）。というのは、私は或る意味では他の人たちよりも自由な、そしてまた或る意味ではもっとずっと不自由な境遇に置かれていたからである。

それに私は、女というものが皆新しい生活を求めたり、自分一人でものを考える場所を欲しがっている訳ではなくて、多くは自分の現在の生活で満足しているのだとも思った。そしてその人たちが送っている生活から受ける印象では、非常に旨く、私などよりもずっと旨くやっていると

いう感じがした。私はそういう人たちが何の滞りもない日々を過しているのを見て、羨ましく思いもし、感嘆もした。この人たちにとって問題などというものはなくて、或いはあったにしても、それはとっくの昔に解決されているのに違いなかった。そんな次第だったから、私は自分が考えているようなことは私自身にしか価値も興味もないものと決めた。

しかし私は書きながら、他のいろいろな女の人、――年取った人や、若い人や、そして生活の仕方や経験の点でも皆違っていて、自活しているのや、職業婦人になりたいのや、妻、また母として忙しい暮しをしているのや、もっと余裕があるのや、――そういういろいろな人と話をしてみて、私の考え方が決して私だけのものではないことが解った。その形式や環境は違っていても、多くの女が、そして女だけでなくて男も、本質的には私と同じ問題と取組んでいて、それにはどういう解決があるかに就いて一緒に話もし、考えたがってもいるのだった。また時計のように正確に歯車が回っているとしか思えない生活をしている人たちの中にも、もっと豊かな休止がある律動を、またもっと自分たちの個人的な要求に適った生き方を、そしてまた、他人、及び自分自身に対してもっと新しい、有意義な関係に立つことを望んでいる点では、私と変らないものが少なくなかった。

そういう訳で、いろいろな女や男の人たちの話や、議論や、告白から得た材料が以下の幾つか

の文章に加えられていくうちに、それはもう私だけの個人的な話ではなくなり、私はこれを、そこに書いてあることの多くを私と分け合い、またそれを暗示してくれた人たちにお返しすることにした。それで私はここに、私と同じ線に沿ってものを考えている人たちに対する感謝と友情を添えて、海から受取ったものを海に返す。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

浜

辺

I

浜辺は本を読んだり、ものを書いたり、考えたりするのにいい場所ではない。私は前からの経験でそのことを知っているはずだった。温か過ぎるし、湿気があり過ぎて、本当に頭を働かせたり、精神の飛躍を試みたりするのにはい心地がよ過ぎる。しかし何度繰返しても同じことで、やはり浜辺へは禿(は)げちょろの藁(わら)の籠(かご)に本や、紙や、もうずっと前に返事を書くはずだった手紙や、削りたての鉛筆や、しなければならないことの表などを一杯詰めて、張りきって出掛けて行く。そして本は読まれず、鉛筆は折れて、紙は雲一つない空と同じ状態のままになっている。読みもしなければ、書きもせず、ものを考えさえもしない。——或いは少なくとも、初めのうちは、である。

初めのうちは、自分の疲れた体が凡(すべ)てで、航海に出て船のデッキ・チェアに腰を降ろした時と同様に、何もする気が起らない。頭を働かしたり、予定通りに仕事をしたりする積りになる毎(ごと)に、

海岸の原始的な律動の中に押戻される。寄せて来て砕ける波や、松林を吹き抜ける風や、鷺が砂丘の上をゆっくり羽搏きしながら飛んで行くのが都会や、時間表や、予定表の気違い染みたざわめきを消して、自分もその魔術に掛り、気抜けがして、ただそこに横になったままである。つまり、その自分が横になっている、海のために平らにされた浜辺と一つになるので、浜辺も同様にどこまでも拡がっている空っぽなものに変り、今日の波が昨日の跡の凡てを洗い去る。

そして二週間目の或る朝、頭が漸く目覚めて、また働き始める。都会でも同じ形でではないが、浜辺の生活なりにである。それは浜辺に砕ける波とともに漂ったり、戯れたり、静かに巻き上がったりし始める。頭に起きたこういう無意識の波が、意識の白い、滑らかな砂の上に偶然にどんな宝を、どんなに見事に磨き立てられた小石を、或いは海の底にあるどんな珍しい貝を投げ出すか解らない。ほら貝、つめた貝、或いはたこぶねさえもが打上げられるかも知れない。

しかしそれをこっちから探そうとしてはならないし、ましてそれが欲しさに砂を掘り返したりすることは許されない。海の底を網で漁るようなことをするのはここでは禁物で、そういうやり方で目的を達することはできない。海はもの欲しげなものや、欲張りや、焦っているものには何も与えなくて、地面を掘りくり返して宝ものを探すというのはせっかちであり、欲張りであるのみならず、信仰がないことを示す。忍耐が第一であることを海は我々に教える。忍耐と信仰であ

る。我々は海からの贈物を待ちながら、浜辺も同様に空虚になってそこに横たわっていなければならない。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com